

I 次の文章を読んで、後の問い(問1～12)に答えよ。(配点 75/150)

脳と言語の「相乗作用」

言語は、それ自体、人間の脳の高度の抽象能力によって生じたものであるが、他方では、脳の抽象活動に対して、非常に大きな補助的・促進的作用を果たしてくれる。「思考とは、自己自身との対話である」とか、「思考とは、^A声なきスピーチである」などということが、かつて、^(注)行動主義的な傾向に属する心理学者によって主張されたことがあった。これはたしかに^aコチヨウではあるが、しかし、多少とも高い抽象レベルにおける思考に関するかぎり、多分に真理をふくむ発言だといってよいであろう。人類は、高度に発達した脳とその最高の産物たる言語との強力な「相乗作用」、またはプラスのフィードバックによって、「万物の^bレイチヨウ」としてのゆるぎない地位をわがものとなしえた、といってもよいかもしれない。

甲

以上のことは、道具の使用とも密接に関連する。動物的な^B「いま」および「ここ」の束縛から抽象の力によって脱却しないかぎり、人間は道具を作りえなかつたであろうし、一方、道具の使用が人間のこの方向への解放をさらに一層促進したものと考えられる。^アのフィードバック関係と似た関係に、ここでもふたたびわれわれは遭遇するわけである。

およそ、ある目的のために人間が道具を作るには、まえもって一定の状況を予想し、そしてその状況に適合したしかたで一定の材料を加工することが必要である。未来において起こるべきある状況を的確に予想するためには、第一に、過去において経験した多くの類似の状況を正確に記憶しておくこと、そして第二に、それらの状況から重要な要素を抽象し、どうしてもよいような要素を捨象することによって、状況の^c型を頭の中で作り上げることが必要である。人間のみが道具を作り、使用することをなしたのは、[×]、食虫類以来の進化の過程において経験した永い樹上生活の結果、前肢と後肢とのあいだに^I上および構造上の分化が生じたこと、ならびに、その後の地上生活における直立姿勢獲得のおかげで、歩行の必要から解放された前肢を「手」として器用に使えるようになったことに負うところが大きい。

^Y、このような肉体的な進化と平行して、右に述べたような思考の面での発達がなかったとしたならば、道具の使用は、たとえはじまったとしてもごく原始的な段階で停滞してしまつたであろう。一個の動物としては実に心細い存在である人間は、道具の使用によって、自然の与えてくれなかつた牙や爪や、暖かく丈夫な毛皮をみずから作り出したわけであるが、これを可能にした最大の要因のひとつがかれの抽象能力にあつたことを忘れてはならない。

社会秩序の問題

乙

人間の抽象的思考と言語との相乗的・フィードバック的作用の^cオンケイは、その社会生活において一層顕著である。

人間の社会生活は、言語なしにはどうも考えられない。このことは、今日の文明社会についてだけでなく、未開社会についても、古代社会についても、ひとしくいえることである。人間社会の最大の特徴は——本能に依存する昆虫の社会とちがって——それが非常に大きく後天的な学習によって成り立っているという点にある。しかし、このことに学者が注意をむけるようになったのは、

II

上、比較的新しいことなのである。むかしの思想家たちは、むしろ、人間の社会生活をもその「生まれながらの本性」によって、つまり、先天的な性向によって説明しようとしてきたといつてよいであろう。そのばあい、人間の本性を「善」とみるか、それとも「悪」と解するかによって、いわゆる「性善説」と「性悪説」とが分かれてくる。

東洋では孟子の性善説と荀子の性悪説とが著名であるが、西洋でも、古代ギリシア以来、この二つの思想の流れを認めることができる。人はみな自己の無知を悟り、真の英知を得ることによって、「良心」の声を聞くことができると考えたソクラテス、人間は「国家的動物」であるといったアリストテレスやかれの見解をうけついでストア学派などは、いずれも前者の系列に属する。近世自然法論におけるオランダのグロテウス (Hugo Grotius 1583 - 1645) やイギリスのロック (John Locke 1632 - 1704) の立場も、この中に入れてよい。

性善説をとるかぎり、人間が平和な社会生活をいとなんでいるという事実は、特に説明を要しない、あたりまえのこととしてとらえられるが、性悪説のほうはそうはゆかない。ヘレニズム時代の哲人エピクロス (Epicurus 341 c.a. - 270 B. C.) や、近世イギリスの哲学者ホブズ (Thomas Hobbes 1588 - 1679) などは、人性は悪であるという考えかたから出発したが、この立場をとるかぎり、ではなぜそのような本性をもつ人間どもが相寄つて集団生活を送りうるかということ、なんらかのからくりで説明しなければならない。このための道具立てがいわゆる「社会契約」 (social contract) の概念であった。性悪説の論者によれば、人間は、本来反社会的ではあるが、一方において伶俐であるから、理性的打算によってその生来の性向を枉げて、社会組織——すなわち、政治的な支配・服従の秩序——を作り上げた、というわけである。(「社会契約」の概念は、のちに、ロックのような性善説論者によつても、主として「国民主権」の原理を正当化するために用いられたが、性善説そのものにとつては不可欠な概念ではない。)

しかし、この「社会契約」理論は、現存秩序の倫理的正当化の根拠としてはいざ知らず、少なくとも人間社会の歴史的起源に関する説明としては、経験的な根拠がきわめて薄弱であるといわざるをえない。人間がいわゆる「自然状態」——すなわち、各人がいかなる統制にも服することなく、完全な自由をキョウジユしていた状態——から「社会契約」という理性的・自覚的な行為によって、支配・服従の秩序を作り出した、ということは、歴史的研究はいうに及ばず、未開社会やサル社会などについての研究の成果ともあきらかに合致しない。

「社会契約」の問題を別にして考えれば、性善説と性悪説とは、科学的にみてどちらが正しかったのであろうか。論点を、「人間には本能的な群集欲ともいべきものがあるかどうか」という点に絞るならば、どちらかといえば、むしろ前者に分がある、といつてよいかもしれない。グロテウスはこの欲求を「社会欲」 (appetitus societatis) と呼んだが、多くの群棲動物と同じく、人間にもある程度まで同類を求める本能があることは、大脳生理学者も認めるところである。

ローレンツ (Konrad Lorenz 1903 - 1990) などが示したように、行動主義者が考えたよりも、

人間の生存的行動ははるかに大きいと思われる。

「社会」はいかなる意味で実在するか

学術論文においても、日常会話においても、われわれは「社会」、「社会秩序」、「社会組織」などということばを心安く用いるが、よく考えてみると、個々の、それぞれ肉体と個性をもった人間はなれて、「社会」というような超個人的実体があるわけではない。かつては、「社会有機体説」(the organismic theory of society) と称して、社会はそれ自体巨大な有機体であつて、そのメンバーである個人は、いわば個々の細胞であるという考えかたもあつた。この思想は、「Ⅰ」という主張をぶくむところから、日本やドイツの全体主義思想とむすびついて、「Ⅱ」や「滅私奉公」などのスローガンの「理論的基礎づけ」として利用されたりしたが、今日ではこのような考えかたをまじめに信ずる人はほとんどいないであろう。

もちろん、それだからといって、「社会」ということばが、それに対応する事実的基盤をまったく欠いている、と考えることもあやまりである。

まず第一に、個々の人間のばらばらの行動ではどういなしとげられないようなことが、社会的に組織された行動によってはじめて可能となることは、いうまでもない。ごく単純な、原始的な例として、未開社会における狩猟や漁撈などを考えてみても、このことは明らかである。

第二に、社会組織や社会過程は、しばしば、個人にとって、その意図や願望を超えた、ある意味で「物的な」力としてのしかかってくる。現代社会における高度に分業化した生産・流過程やそのための巨大で複雑なギコウなどは、そのよい例であろう。マルクスがいわゆる「自己疎外」現象と考えたのは、まさにこのようなばあいである。また、言語生活を考えてみても、日本語とか英語などは、それを話す個人にとって、やはり文化的に「与えられたもの」として、Ⅲ 上は強い拘束力をもっている。「シロ」を「クロ」といい、「サギ」を「カラス」とよんでも、Ⅳ 上はいつこうにさしつかえないはずであるが、「不思議の国」のアリスが経験したように、既成の社会的約束を無視したことばづかいはすると、伝達過程はひどく混乱してしまう。

以上のような意味での社会の、いわば「物的」な側面を認めることと、超個人的な実体ないし有機体としての社会というものを想定することとは、決して同じではない。ましてや、個々の人間の現実の意識や意志から独立した、「社会自体」の「意識」や「意志」などを考えることは大きなあやまりであり、「社会」というものが、ひとつの統一的な実体ではなく、むしろさまざまな過程ないし作用の綜合であり、究極においては個々の人間の行動に支えられているものだけであることを、われわれはつねにネットウにおかねばならない。

(碧海 純一 「法と社会—新しい法学入門」)

(注) 行動主義：意識を対象とする伝統的心理学に抗して、外部から客観的に観察可能な行動だけを研究対象にする心理学上の立場。J・B・ワトソンが唱えた。

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問1 傍線部 a ～ g のカタカナを漢字に直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはつぎりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

- a コチヨウ
- b レイチヨウ
- c オンケイ
- d キヨウジユ
- e コウエキ
- f キコウ
- g ネットウ

問2 空欄 ～ に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① I - 個体 II - 社会学 III - 実際 IV - 制度
- ② I - 個体 II - 思想史 III - 実践 IV - 意味
- ③ I - 生物 II - 社会学 III - 実践 IV - 社会
- ④ I - 生物 II - 思想史 III - 論理 IV - 理論
- ⑤ I - 身体 II - 歴史 III - 理論 IV - 意味
- ⑥ I - 身体 II - 思想史 III - 理論 IV - 社会
- ⑦ I - 機能 II - 歴史 III - 論理 IV - 制度
- ⑧ I - 機能 II - 思想史 III - 実際 IV - 理論

問3 空欄 ・ に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちからそれぞれ一つ選べ。ただし、二つとも正解を選ばなければ点を与えない。空欄 X の解答番号は 、空欄 Y の解答番号は 。

- ① たしかに ② むしろ ③ 奇しくも ④ または
- ⑤ 例えば ⑥ 要するに ⑦ その結果 ⑧ しかし

問 4 空欄 **ア** に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **11**。

- ① 脳の活動と相乗効果とのあいだ
- ② 脳の活動と道具使用とのあいだ
- ③ 脳の活動と抽象作用とのあいだ
- ④ 脳の抽象作用と道具とのあいだ
- ⑤ 脳の思考能力と言語とのあいだ
- ⑥ 脳の思考能力と道具とのあいだ

問 5 空欄 **イ** に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **12**。

- ① 個人あってこそはじめて国家が存在しうる
- ② 個人あってはじめてその集合体は存在しうる
- ③ 個人なくしてはその集合体も存在しえない
- ④ 全体なくしては有機体は存在しえない
- ⑤ 全体あってはじめて国家は存在しうる
- ⑥ 全体あってはじめてその各部分が存在しうる

問 6 傍線部 A 「思考とは、声なきスピーチである」では、隠喩（暗喩）が用いられている。これと同じ用例を、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は **13**。

- ① 事実は小説よりも奇なり。
- ② 新約聖書はキリスト教の聖典である。
- ③ 人間とは、道具を使用する動物である。
- ④ 人間は、本性上、市民社会的動物である。
- ⑤ 彼女は雪のように白いウサギを飼っていた。
- ⑥ レスラーの肉体は鋼だ。
- ⑦ その犬は腕兎のごとく逃げた。
- ⑧ その時の彼は、まるで水を得た魚のようだった。

問7 傍線部B「『いま』および『ここ』の束縛から抽象の力によって脱却しないかぎり、人間は道具を作りえなかった」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 抽象能力を駆使しないかぎり、道具を作ることはできないため、現在の貧しい生活からより便利な生活への脱却は不可能であるから。
- ② 動物のように本能のまま欲望に従うかぎり、緻密な計算により道具を作ることはできないから。
- ③ 過去に経験したさまざまな類似事例を正確に記憶し、それを再現しなければ道具を作ることは不可能であるから。
- ④ 過去に経験したさまざまな類似事例を正確に記憶し、それに縛られずに未来を予測しなければ新たな道具を作ることは不可能だから。
- ⑤ 過去に経験したさまざまな類似事例を正確に記憶し、それに類似した状況を予想することができなければ、道具を適切に使用することは不可能だから。
- ⑥ 過去に経験したさまざまな類似事例を正確に記憶し、そこから必要な情報を取捨選択しなければ、道具を作ることはできないから。

問8 傍線部C「このこと」が指す内容として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 人間が言語によって社会生活を営んでいること
- ② 人間社会が言語なしにはとうてい考えられないこと
- ③ 人間が後天的に言語を習得し、社会生活を営んでいること
- ④ 人間社会の最大の特徴が言語なしにはとうてい考えられないこと
- ⑤ 人間社会が非常に大きく後天的な学習に依存していること
- ⑥ 人間が非常に多くの事柄を後天的に学習することによって人間の社会基盤が成り立っていること

問 9 傍線部 D 「性悪説のほうはそうはゆかない」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 性悪説では、実際に人間が平和な社会生活をいとなんでいることは全く事実と反するから。
- ② 性悪説では、実際に人間が平和な社会生活をいとなんでいることは容認しがたい事実だから。
- ③ 性悪説では、実際に人間が平和な社会生活をいとなんでいることを強く主張できないから。
- ④ 性悪説では、実際に人間が平和な社会生活をいとなんでいることを常に不満に思っているから。
- ⑤ 性悪説では、実際に人間が平和な社会生活をいとなんでいることをうまく説明できないから。
- ⑥ 性悪説では、実際に人間が平和な社会生活をいとなんでいることを再解釈する必要があるから。

問 10 空欄 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 道具使用の条件
- ② 言語と道具使用
- ③ 道具と言語能力
- ④ 道具と抽象能力
- ⑤ 道具と人間の進化
- ⑥ 道具と生活の向上
- ⑦ 思考と道具の「相乗効果」
- ⑧ 思考と言語の「相乗効果」

問 11 空欄 に入る小見出しとして最も適当なものを、次の①～⑧のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 社会生活と「社会契約」
- ② 根拠薄弱な「社会契約」
- ③ 社会生活の原理としての「社会契約」
- ④ 「社会契約」の功罪
- ⑤ 性善説・性悪説の功罪
- ⑥ 時代遅れの性善説・性悪説
- ⑦ 社会生活と「人間の本性」
- ⑧ 「人間の本性」としての性悪説・性善説

問12 本文の内容に合致するものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 19。

- ① 人間の本性を「善」とみなすか、「悪」とみなすかによって、「性善説」と「性悪説」に分かれるが、東洋では孟子、西洋ではソクラテス、アリストテレス、エピクロス、そして近世のグロートイウスやロックの思想が前者に該当する。
- ② われわれは「社会」、「社会秩序」、「社会組織」等のことばを学術論文や日常会話において使用しているが、各々の肉体や個性をもった人間をはなれた超個人的実体として「社会」が実在しているわけではない。
- ③ かつて行動主義的な傾向に属する心理学者によって「思考とは、自己自身との対話である」というような主張がなされたが、こうした言い回しは、ある程度高度な抽象的思考に関するかぎり、一定の賛同を得ている。
- ④ 個々人がばらばらに行動しているかぎりではとうていなしとげられないようなことが社会的に組織されることによって容易に可能となり、社会組織が個人の意図や願望を超えた「物的な」力としてのしかかってくることを考えると、社会は超個人的な実体であると言える。
- ⑤ 「社会契約」理論は、未開社会やサル社会に関する研究成果ともあきらかに合致しないことを考えると、根拠があまりにも薄弱で、何の役にも立たない、きわめて不完全な理論であると言わざるをえない。
- ⑥ 人間だけが道具を作り、使用することができた唯一最大の要因は、前肢と後肢が構造上分化すると共に歩行の必要から解放された前肢を「手」として器用に使えるようになったことにある。

II 次の文章を読んで、後の問い（問1～12）に答えよ。（配点 75 / 150）

I は集団的な工房やギルドのシステムを超越した天職としての II であるという認識が登場するのは一六世紀と言われる。もちろんその背景には、成り上がりの都市貴族や大商人たちがおのれの経済力を誇示する目的で I を後援し、贅沢な美術品を蒐集し、あるいは都市自治体が大規模な建造物の建設を企てたということもある。こうしてしだいに「職人（artière）」としての美術家が画家や彫刻家といった「芸術家（artista）」として認められるようになり、無名の III たちにより作られていた「工芸品」が個々の I を制作者の名にもつ「芸術作品」に変貌をとげていった。

しかし、美術家の地位が大きく向上したルネサンス期のイタリアですら、美術家の多くは手仕事に携わり小売業にかかわる無学な職人として蔑まれていた。現に「美術家は職人や店舗主の子弟の場合が多く、著述家は貴族や専門的職業人の子である場合が多い。このコントラストはじつに著しい」のであった。一四七四年に生まれたミケランジェロ・ブオナローティは例外的に貴族の出であったが、弟子のコンデイヴィの書いた伝記によると、父や兄は彼の絵画への傾倒を「恥さらし」なことと考え、そのため「彼はよく打たれて惨い目にあっていた」とある。Eイシヨあるブオナローティ家にとって、一門から絵描きフゼイが出るなどということは由々しいスキャンダルと見なされていたのである。

ルネサンスハツシヨウの地でこうなら、アルプスの北では言うまでもない。一四世紀のニエールンベルクでは、画工は、パン屋、肉屋、仕立屋、毛皮職人、靴屋、金属細工師、ガラス工と同レベルの職人であったと言われる。ドイツ人の画家アルブレヒト・デューラーが一五二〇年にネーデルラントに旅行したさいの日記には、アントウェルペン（現アントワープ）の祝日に市民がそれぞれの階級ごとに集まってするパレードの様子が記されている。それによると、最初に行進するもつとも低い階級の集団として「金細工師、画家、石工、綾織刺繍業者、彫刻家、指物師、大工、水夫、漁夫、肉屋、皮革業者、布地屋、パン焼業者、仕立屋、靴屋、その他あらゆる職人やまた日常生活に奉仕するさまざまな職工や店員たち」とあり、その後商人、兵隊、役人と続き、その後から「荘厳かつ華麗に着飾った上流の人々」がくり出し、最後に聖職者の集団で終わる。ここに画家や彫刻家の社会的な地位と序列が 甲 と読み取れる。

アカデミズムと無縁に育った職人が、おのれの仕事を理論化し自前の言語で公表するという一六世紀文化革命は、もともとはこのように ア に始まる。歴史学者ピーター・バーグの書には「この当時のイタリアには二つの文化と二つの専門的訓練の方式があった。すなわち職人文化と知的文化、イタリア語の文化とラテン語の文化、工房に基礎を置いた文化と大学に基礎を置いた文化である」とある。当時の先進的な美術家は、絵画や建築に学的根拠を与えることで二つの文化の越境を企て、文化のこの二重構造を打破しようと努力したのである。それは彼らがギルドの縛束を脱して自立した芸術家としておのれを確立してゆく過程とパラレルに進められた。

その先駆者を私たちは、ともに一四世紀後期から一五世紀前半に生きたチエンニーノとギベルティに見ることができる。

チエンニーノ・チエンニーニは、画家としては見るべきものを遺してはいないが、一四〇〇年頃

に『絵画術の書』を著している。絵画のための技術書で、描写手法だけではなく、フレスコ画やエ
サイの技法、そして当時はすべて手製であった顔料の製法などもくわしく記されている。書かれて
いるノウ・ハウは、それまでは工房の徒弟にたいしてのみ口述と実地で伝授されていたものである。
ギルドは徒弟制度によって技術の保存と継承をはかり、同時にその外部への漏洩ろうえいを防ぎ独占を維持
してきた。しかしチェンニーが、手写本とはいえ、それを俗語で文章化し、教科書的にまとめあ
げ、公表したということは、ギルドにたいする職人の関係が変化しはじめたことを示唆している。
チェンニー自身には機密の漏洩ろうえいというような自覚はなかったかもしれないが、しかしすくなくと
も、絵画は一定のカリキュラムのつとつて教示しうるもの——学芸——だという理解は新しいも
のであり、それまでの没理論的で経験主義的な徒弟教育に変革を促すものであった。

チェンニーは、画家の修業として、一方では「すぐれた師匠たちの手になるもので目にしうる
かぎりの良い作品」を模写し「その人の手法やその人の画風」を身につけるように薦め、そのかぎ
りで徒弟制度の効用を認めている。しかしそれと同時に「お前が手にしうるもつとも完璧な道案内、
最良の舵かじは、栄光の門に他ならぬ自然物の写生であることを弁わきまえ給え。この自然物は、他のいかな
る手本にもまさるものであるから、これに大胆に信頼を寄せて、写生しつづけるのである」とも語
り、自然主義に依拠すること、イ。

そのことは同時に絵画にたいする見方の変化をもともなっていた。実際、第一章は次のようにあ
る。

一番に価値のあるものが知恵であり、それから派生するいくつかのわざが、すぐ後に続き、
そのひとつに、手の働きによつていながら知恵を基本とすべきものがあつて、これがすなわち
絵画と呼ばれるわざである。このわざに必要なのは、想像力と手の働きであり、これらが、目
に見えないものを見つけ出して、それらに自然物としての外観を与えるのである。つまり、手
によつてそれらを定着し、ないものをあるがごとくに示すのである。……詩人は、みずからが
ひとつそなえているその知恵によつて、その意志のおもむくままに、組み立てたり結合したり、
好みのまま如何いか様に振る舞うこともできて 乙 である。同様に、画家もまた、立像、
坐像ざざう、半人半馬像などを、好きなようにその想像力のおもむくままに組み立てうる 乙
が与えられているのである。

絵画の制作はクライアントの指示にしたがつた職人仕事ではもはやなく、「知恵」すなわち学問
を基礎にもつ以外には何ものにも拘束されない画家の想像力にのつとつてなされる主体的な行為だ
とする、絵画にたいする新しい見方が、ここにはちらりと顔をのぞかせている。

金属細工師ロレンツォ・ギベルティ（一三七八一—一四五五）は、フィレンツェのサン・ジヨヴァ
ンニ洗礼堂の扉のレリーフの制作者を決めるコンクールに勝利し、ブロンズ扉二面を制作したこと
で知られている。フィレンツェ市が催した一四〇一年のこの「ゼンダイミゼン」のコンクールは
「本格的なフィレンツェ・ルネサンスの幕開けを告げる一大イベント」と言われる。実際、ここで
はじめて「作者」としての個人名を冠せられた「芸術作品」が制作された。そのギベルティは一四
四七年に俗語で『コメンタリー』を著している。『コメンタリー』は三書からなり、第一書は、

ローマ時代の建築家ウィトルウィウス、そしてやはりローマ時代の百科全書の執筆者プリニウスに依拠した古代の美術家についての記述であり、第二書は一四世紀の美術史と美術評論、そして自伝である。第三書は視覚芸術の基礎としての光学と人体比例論などにあてられているが、これは未完に終わっている。

職人ギベルティがフィレンツェにおける人文主義運動の^Bカンカを受けて書いたこの『コメンタリー』の全体をつらぬく思想は、煎じ詰めれば、絵画や彫刻の制作には手作業の習熟だけではなく「学識」が必要とされ、^C視覚芸術は学的に基礎づけられねばならない、というものであった。それは彼が頻用している *docto*、(現代イタリア語の *dotto*、すなわち「学識ある」「理論に精通している」) が彼の美術批評のキー・ワードになっていることから窺^うえるであろう。そのことはまた、第二書の自伝の次のくたりからも読み取ることができる。

私は、文学の素養やあらゆる理論的知識の確信がなければ実践されえないこの芸術に私が精通するように配慮してくれた両親に、無限の感謝をささげる。かくして両親の配慮と理論的知識についての(語教本の)教えによって、文学作品、あるいは言語や技術にかんする学問(の知識)が豊かになった。そうして私は(それらについて)書かれた書物に喜びを見出し、(そこから得た知識)魂の所有物となり、それによって私は最終的成果であるこの書物を準備した。……私は、金銭に従属することなく、芸術に献身した。私は少年時代からいつも非常に献身と鍛錬をもって、それを探求してきた。それゆえ私は、いつもその基本原理を修めようとして、自然はどのように働くのか、いかにしたらそれに近づくことができるのか、どのようにして物の表面は目に達するのか、視力はいかに働くのか、目に見える〈形〉はいかに生ずるのか、そして鑄造芸術や絵画芸術の理論はどのようにして完成さるべきか、といったことを研究しようとしてきた。

美術史の世界では、この『コメンタリー』第二書は、一四世紀美術史の正確な資料として、さらには西欧における美術家のはじめての自伝でもあれば美術家による最初の美術批評として、高い評価が与えられている。それにひきかえ第一書と第三書は、古代と中世の著述家からの、それもかならずしも正確な理解にもとづくわけではない ウ として、評価は低く、資料的価値も認められていない。

しかしそういう見方は、誰でもが書物を書くことができ、それゆえ書籍の洪水から無価値な書籍を淘汰しなければならぬ現代人の目で見れば、いわゆる「^(注)ウィック史観」というべきであろう。一五世紀の職人の世界はそうではない。読書人口でさえ少なく、まして書籍を書くとなればきわめて稀^{まれ}な出来事であった。したがって、その書籍を現代人の価値基準で評価するよりも、むしろ第一書、第三書もふくめて、この時代に職人美術家が古代文献を独学し、書物を書き残したというその事実自体のなかに^Dいかなる時代精神が芽生えていたのかを探り、社会的な変動の兆しを読み取るべきであろう。

高等教育とは無縁の手職人として文字文化から疎外されていた職人美術家が、先行する作品を自分の言葉で論評したことはもとより、みずからの生涯と作品について書き残し、自分たちの仕事に

理論的基礎の必要なことを訴え、自力でその学的基礎の著述を試みたのである。たとえその理論が誤りをもふくむ未消化な借り物でしかなく、オリジナリティやエッセンスに欠けているにせよ、その背伸びした精神のありようそれ自体は知の世界の大きな地殻変動を予感させるものである。ギベルティは手作業で作られる工芸品を自由学芸にもとづく芸術作品に高めるべしとの野心を口にし、
職人の世界から知識人の世界への越境を試みた最初の職人美術家のひとりであった。

チェンニートとギベルティは一六世紀文化革命を先駆けたのである。

(山本 義隆「一六世紀文化革命」)

(注) ウィツゲ史観：現在の基準で過去の歴史を批評する見解

※ 問題作成にあたり、本文を一部改変した。

問 1 傍線部 a ～ g の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直せ。解答は解答用紙の所定欄に読みやすいはつきりした楷書体で書くこと。解答番号は ～ 。

a 葎

b ユイシヨ

c フゼイ

d ハツシヨウ

e ユサイ

f ゼンタイミモン

g カンカ

問 2 空欄 **I** へ **III** に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **27**。

- | | | | |
|---|---------|----------|-----------|
| ① | I - 創造者 | II - 職人 | III - 芸術家 |
| ② | I - 創造者 | II - 芸術家 | III - 職人 |
| ③ | I - 職人 | II - 創造者 | III - 芸術家 |
| ④ | I - 職人 | II - 芸術家 | III - 創造者 |
| ⑤ | I - 芸術家 | II - 創造者 | III - 職人 |
| ⑥ | I - 芸術家 | II - 職人 | III - 創造者 |

問 3 空欄 **甲** ・ **乙** に入る語として最も適当なものを、次の①～⑦のうちからそれぞれ一つ選べ。解答番号は **28** ・ **29**。

- | | | | | | |
|----------|------|------|------|------|-----------|
| 甲 | ① 漠然 | ② 悠然 | ③ 天然 | ④ 漫然 | 28 |
| | ⑤ 平然 | ⑥ 判然 | ⑦ 当然 | | |
| 乙 | ① 安定 | ② 平和 | ③ 平等 | ④ 天才 | 29 |
| | ⑤ 自由 | ⑥ 安心 | ⑦ 安全 | | |

問 4 空欄 **ア** に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は **30**。

- ① 集団的な工房やギルドのシステム
- ② 贅沢な美術品を蒐集した成り上がりの都市貴族や大商人たち
- ③ 大規模な建造物の建設を企てた都市自治体
- ④ 貴族や専門的職業人の子である場合が多い著述家
- ⑤ ドイツ人の画家アルブレヒト・デューラー
- ⑥ 職人として蔑まれていた画家や彫刻家

問 5 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 絵画修行の鍛錬をも否定している
- ② 徒弟制度の強化をも提案している
- ③ 栄光からの逃避をも認めている
- ④ 伝統からの離脱をも促している
- ⑤ 師匠への信頼をも歪めている
- ⑥ 模写への疑念をも示している

問 6 空欄 に入るものとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① いかにも変形とみられるもの
- ② いかにも類品にみまがうもの
- ③ たんなる模造とみるべきもの
- ④ たんなる借用にすぎないもの
- ⑤ ほとんど偽装とよぶべきもの
- ⑥ ほとんど誤解にもとづくもの

問 7 傍線部 A 「俗語で文章化し、教科書的にまとめあげ、公表した」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① 画家としては見るべきものを遺していなかったから。
- ② 書かれているノウ・ハウは口述と実地で伝授されるべきであったから。
- ③ ギルドは徒弟制度によって技術の保存と継承をはかるべきであったから。
- ④ 技術が外部へ漏洩するのを防いで権益の独占を維持する必要があったから。
- ⑤ 機密の漏洩が徒弟教育に変革を促すとの自覚をもっていたから。
- ⑥ 絵画は一定のカリキュラムにのっとって教示するものと理解していたから。

問 8 傍線部 B 「栄光の門に他ならぬ自然物の写生であることを弁え給え」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 34。

- ① すぐれた師匠たちの良い作品を模写することは修行になるから。
- ② すぐれた師匠たちの手法や画風を身につけることは有益であるから。
- ③ 徒弟制度の効用は認めるべきものであるから。
- ④ 自然物は他のいかなる手本にもまさるものであるから。
- ⑤ 大胆に信頼を寄せて写生しつづけることが肝要であるから。
- ⑥ 絵画にたいする見方の変化をもともなっていたから。

問 9 傍線部 C 「視覚芸術は学的に基礎づけられねばならない」の理由として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 35。

- ① 芸術は文学の素養やあらゆる理論的知識の確信がなければ実践されえないから。
- ② 理論的知識についての教えによって学問の知識が豊かになったから。
- ③ 書物から得た知識が魂の所有物となったから。
- ④ 最終的成果は書物を準備することであつたから。
- ⑤ 金銭に従属することなく芸術に献身する必要があつたから。
- ⑥ 少年時代からいつも非常な献身と鍛錬をもつて芸術を探求してきたから。

問 10 傍線部 D 「いかなる時代精神が芽生えていたのかを探り、社会的な変動の兆しを読み取る」の説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 36。

- ① 正確な資料性と伝記・評論の初発性に対して美術史は高い評価を与えていること。
- ② 第一書と第三書は古代・中世の著述家の引用であつて資料的価値が認められないこと。
- ③ 記述内容に対する低い評価はウィック中観というべきものであること。
- ④ 高等教育とは無縁の手職人が先行する作品を自分の言葉で記述して未完に終わったこと。
- ⑤ 理論に誤りがありオリジナリティやエレガンスに欠けていること。
- ⑥ 背伸びした精神のありようそれ自体は知の世界の大きな地殻変動を予感させること。

問11 傍線部E「職人の世界から知識人の世界への越境」の説明として最も適当なものを、次の

①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は 37。

- ① 金属細工師ギベルティがフィレンツェのサン・ジョヴァンニ洗礼堂の扉のレリーフの制作者を決めるコンクールに勝利し、ブロンズ扉二面の制作を試みたこと。
- ② 職人ギベルティが芸術に精通して才能を発揮できたのは両親の配慮によるものであったため、彼は両親に無限の感謝をささげようとしたこと。
- ③ 美術史の世界では、『コメンタリ』第二書には高い評価が与えられ、それにひきかえ第一書と第三書の評価は低いため、資料的価値の向上を試みたこと。
- ④ 誰でもが書物を書くことができ、それゆえ書籍の洪水から無価値な書籍を淘汰しなければならないという現代人の見方は、いわゆる「ウィッグ史観」であること。
- ⑤ 高等教育とは無縁の職人芸術家が、自分たちの仕事に理論的基礎の必要なことを訴え、自力でその学的基礎の著述を試みたこと。
- ⑥ 文字文化とは無縁の手職人が自力で試みた著述は、オリジナリティやエレガンスの理論について誤りをふくみ、未消化な借り物であったこと。

問12 本文の内容に合致するものを、次の①～⑨のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 38 ・ 39。

- ① 絵画制作に必要な技術をチェンニーノが『絵画術の書』として公表したのは、ギルドにたいする職人の関係が変化したことを示唆しており、ギルド内の機密を漏洩することで、それまでの没理論的で経験主義的な徒弟教育に変革をもたらしたいと考えてのことだった。
- ② ルネサンス期のイタリアでも美術家の多くは手仕事に携わる無学な職人として軽視されており、貴族出身のミケランジェロは絵画への傾倒を一門の恥辱でありスキャンダルであると考えていたことが、弟子のコンデイヴィの書いた伝記に記されている。
- ③ すぐれた師匠の手になる良い作品を模写して師匠の手法や画風を身につけることは、画家の修業として意味があることをチェンニーノは認めているが、一方、修行の最良の方法は実在する栄光の門の写生であるとして、絵画にたいする見方の変化をも示している。
- ④ ファイレツェにおける人文主義運動に影響されてギベルティが書いた『コメンタリ』の全体をつらぬく思想は、視覚芸術には手作業の習熟よりも学的な基礎づけが必要であるというものであり、そのことは彼がその説明に頻用している言葉からも窺える。
- ⑤ チェンニーノによれば、知恵から派生するわざのひとつである絵画が、想像力と手の働きによって目に見えないものに自然物としての外観を与えることは、詩人が知恵によって、その意志のおもむくままに振る舞うことと同様であり、知恵こそ一番に価値があるという。
- ⑥ デューラーのネーデルラント旅行のさいの日記には、アントウエルペンの祝日の市民パレードの様子が記されており、その行進の最初が工芸作家や画家で、着飾った上流の人々に奉仕する聖職者が最後に行進することは、工芸作家や画家の地位を明瞭に示している。
- ⑦ 古代と中世の著述からの不正確な引用が見られる『コメンタリ』の第一書と第三書を美術史の世界では低く評価するが、その見方はウィッグ史観であり、一五世紀の職人美術家が古代文献を独学して書物を書いた事実に当時の時代精神や社会変動を窺うべきである。
- ⑧ ギベルティは、手作業によって制作される工芸品を自由学芸によって制作される芸術作品に高めようとしたが、その理論が誤りを含む未消化な借り物であったため、最初の職人美術家のひとりに位置づけられることになった。
- ⑨ 一六世紀のイタリアには二つの文化と二つの専門訓練の方式があり、ギルドから自立した芸術家として自身を確立しようとしたチェンニーノとギベルティは、芸術に学的根拠を与えることで文化のこの二重構造を打破した先進的な美術家として知られている。